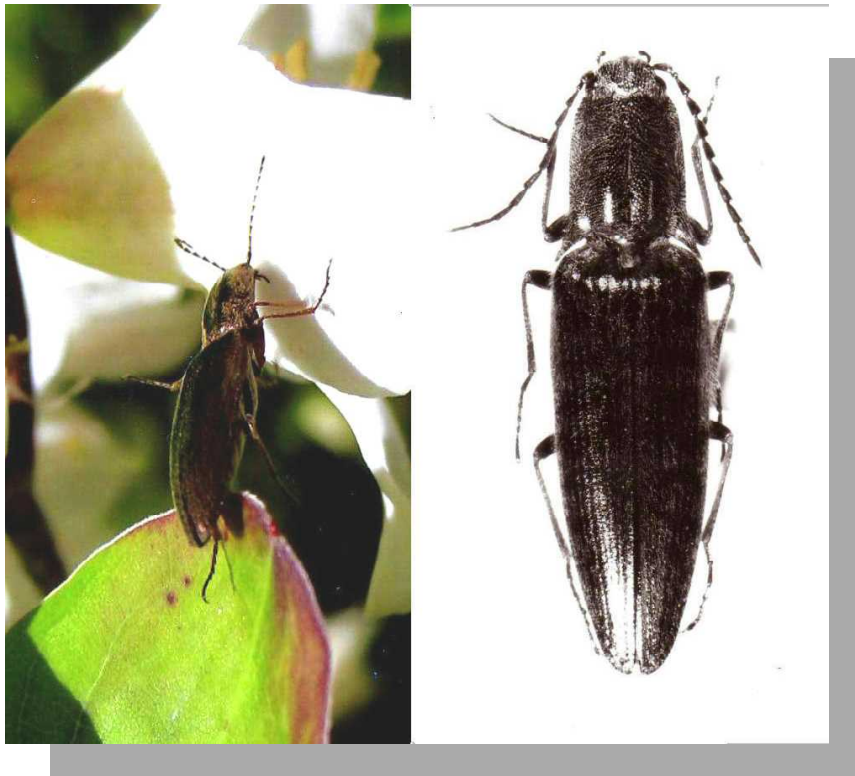


三河の昆虫

MIKAWA NO KONCHU No.65
The Mikawa Insects Association



オオダイルリシモフリコメツキ

Actenicerus odaisanus (Miwa,1928)

体長 15 - 20mm. 体は細長くて船型で、体表面は銅色の金属光沢を有する美麗種.

紀伊半島の山岳地帯に分布. 右の標本は、大台ヶ原で花にきていたものを採集した成虫.

2018

三河昆虫研究会

三河の昆虫 No.65

三河昆虫研究会

The Mikawa Insects Association

目 次

大平 仁夫	虫屋のよき時代の思い出から (1)	p.909 - 910
山崎 隆弘	三河の虫屋 松野更一氏	p.911 - 912
杉坂 美典	ヒョウモンチョウ類5種類の小呂湿地における出現期について (その3)	p.913 - 916
山崎 隆弘	モンクチビルテントウの東三河における分布について	p.917 - 918
吉鶴 靖則	愛知県田原市でスナアカネとハネビロトンボを記録	p.919 - 922
山崎 隆弘	モンクチビルテントウの東三河における分布について	p.889 - 890
浅岡 孝知	愛知県豊橋市南部で見られるようになった昆虫(2017)	p.923 - 924
大曾根 剛	豊田市足助地区のヤマトスジグロシロチョウの記録	p.925 - 926
市川 靖浩	三河湾佐久島におけるコマルケシゲンゴロウの記録	p.927 - 928
市川 靖浩	豊田市足助地区でキマダラカメムシを採集	p.929 - 930
原田 究	2017年度 第3回採集観察会参加記 茶臼山	p.933 - 934
大場 裕一	蝶類研究資料館で企画展「藤岡コレクションと愛知県のチョウ」を開催	p.935 - 936
白井 和伸	奥三河のミドリシジミ	p.937 - 938
短 報		
大曾根 剛	長野県平谷村のムラサキツバメ 7月の記録	p.928
吉鶴 靖則	愛知県東海市でアカハネナガウンカを記録	p.930
原田 究	愛知県北設楽郡設楽町段戸裏谷でオオシモフリスズメの追加記録	p.931
小鹿 亨	岡崎市北山湿地で外来種・ムネアカハラビロカマキリを観察	p.932

三河の昆虫 No.65 ISSN 0023-3218 2018年3月24日

三河昆虫研究会・事務局 〒444-3511 愛知県岡崎市舞木町狐山6-4 ☎0564-48-4368

E-mail:mikawakonken@yahoo.co.jp 郵便振替 00830-9-14465

会長:大平仁夫 副会長:山崎隆弘 会計:浅岡孝知

会誌編集委員:

山崎隆弘 浅岡孝知 杉坂美典 市川靖浩 大場裕一 小鹿 亨

印刷:安城印刷(株) 〒446-0039 愛知県安城市花ノ木町5-2

虫屋のよき時代の思い出から (1)

大平 仁夫

1984年(昭和59年)は、今から約33年前の太平洋戦争も終り、海外で昆虫学者として活躍されていた研究者も、体一つで内地に引き上げてこられ、それぞれの郷土などで活動を再開され、交流が始まった時代のことです。そのころ名古屋では、名古屋女子大へ職が決まった佐藤正孝さんは、若手のホープとして活躍されていました。私も愛知県に流れ着いて、愛知教育大学や岡崎国立共同研究機構に職を得て、コメツキムシの仕事を手掛けているときで、成虫は難しいので、東京農業大学の昆虫研究室で神谷一男先生や澤田玄生先生らの指導を受けて、文献なども集めているころの思い出です。

懐かしい写真

デスクを整理していたら、一枚の懐かしい写真が出てきましたので、それについての思い出話です。当時の私はコメツキムシの成虫や幼虫を研究しようと思っていて、東京文京区の古本屋で購入した三輪勇四郎先生のコメツキムシの学位論文のモノグラフを毎日手元に置いて、将来は自分もこんな仕事をしたいと寝るときも枕元に置いていました。

三輪先生を囲む会

コメツキムシのモノグラフは学位論文とはいえ、代表的な自筆の手描きスケッチのカラー図が掲載された当時の論文としては豪華版でした。名古屋の佐藤正孝さんから連絡が入り、「三輪先生が四日市の郷里へお帰りになつていたので、先生を囲む会を開きたいので、出席したら」と誘われたのです。内心は三輪先生が何を言われるか心配もあつたでしたが、先生は初対面の私に「自分ほコメツキの研究を止めたので、心配も配慮も必要ないので、君の思うとおりにやってください」と言われてほっとしました。先生が新種として記載されたオオダイルリシモフリコメツキ *Actenicerus odaisanus* は、一色周知先生と旅館で湯に入っているときにその窓に飛来したのがそれだったなどの話も聞くことができ、色紙に「師走なお虫の集いや出で湯の里」の句を書いていたことができました。また、この会には三輪先生と交流のあつた次の方が参加されていました。(敬称略・順不同)市橋甫、宮田靖男、後藤光男、石田勝美、奥村大三郎、成瀬善一郎、長谷川仁、佐藤正孝、石田昇三。

三輪勇四郎先生についての詳しいことは、石田昇三さんが四日市市文化振興財団の広報誌に紹介されているのでご覧いただきたい。ここに掲載の当日の写真の一部は、向かって左の奥が三輪先生、手前が佐藤先生、左の奥が奥村先生、手前が長谷川先生です。戦後とはいえ、皆が助け合つてやつて行こうという気持ちで思い出の多いよき時代でした。現在では情報網が発達していて、相手に自分の情報を先取りされないようにしながら研究する分野もあると聞きます。分類の分野では、新種とする種を先取りされて記載されるようなもので、研究者も同好者も、モラルはお互いに守って、楽しい研究を続けることをしたいと思います。

四日市市での三輪先生については、市橋甫さんが三重生物2000-9の28頁に「三輪有四郎先生



写真 「三輪先生を囲む会」左から佐藤さん・三輪先生・奥本さん・長谷川さん 御在所付近の旅館にて

の思い出」と題して紹介されています。なお市橋さんは、当時は御座所山の日本カモシカセンターに勤務され、三重昆虫談話会の「ひらくら」の発行等、その主要メンバーとしても活躍された方です。

台北大学で三輪先生のコメツキムシを調べる コメツキ標本調査余話

三輪勇四郎博士が研究されたコメツキムシ類などの標本は、台北大学の資料室に保管されていて、新種の記載に用いられたタイプ標本や、G. Lewis が日本で採集した標本などもあって、日本のコメツキムシを同定するには欠かせない貴重種があるので、調べたいけれど、台湾はすでに日本のものではなく、各地の主要部には中華民国から監視人が配属されていて、簡単に見ることはできないので、困っていたら、広島の中村慎吾博士はその頃にカミキリムシの研究をされており、相談の結果、台北大学の朱博士に橋渡しをお願いすることになり、標本などを調べることができた。

標本調査の予定が終わったので、台北の市内にある古本屋を中村さんと見て回った。日本に引き揚げた研究者たちが残していった文献などが、かなり高価な値で売りに出ている。店主に「半額にしたら買ってやる」など言って店を出て中村さんと散歩していると、後ろから古本を抱えた店主が走ってきて、「その値で買ってくれ」と頼まれ購入した話など、当時はそのような面白いエピソードがたくさんあった。台湾は一時治安が悪かったが、今は先住民がいる山岳地帯にも入れるようで、機会があったら魅力の尽きない台湾に出かけたいと思っている。

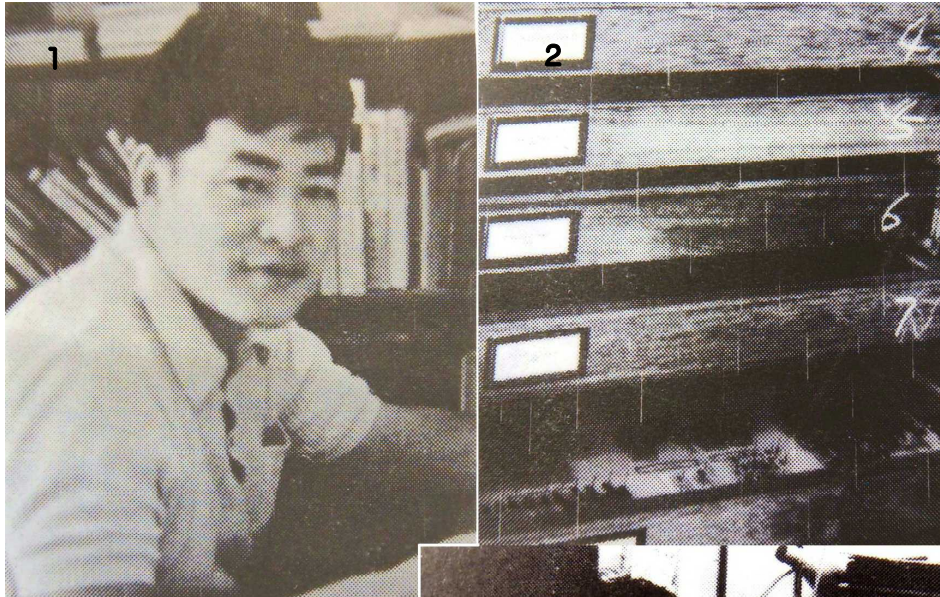


写真1 朱耀汗 教授

写真2 三輪先生のコメツキムシが入った
標本箱

写真3 カミキリ成虫を調べている中村
慎吾さん その当時はカミキリム
シに熱中されていた

文献

石田昇三, 2003. 三輪勇四郎 戦前台湾で活躍した昆虫学者, ラ・ソージュ 20: 42 ~ 45., 四日市市文化振興財団.

市橋甫, 2000 三重生物 50, p.28, 三重生物教育会.

三河の虫屋 松野更一氏

山崎 隆弘

松野さんとは昆虫大好き人間の仲にあつて、日々の多くを大平仁夫先生の下で、虫と関わる人生を歩んでまいりました。昆虫趣味はひとりでも楽しいものですが、仲間が居ればなお楽しいものです。平成29年の夏のことです。突然、ご子息である松野光恭氏からの訃報の知らせを受けました。まさに耳を疑う瞬間でした。まったく信じられない瞬間でした。この所、しばらくお会いしていなかったこともあり、本当に悔やまれてなりません。もっと、もっと話がしたかったし、いろいろと教えて頂きたいこともあったのですが本当に残念です。しかし、今となっては酷な現実と向かい合うしかありません。人生の先輩である松野さんとは、三河昆虫研究会のほか三河生物同好会を通しての思い出が山ほどあります。その松野さんとのお付き合いで、どれほど私の虫人生に彩を添えて頂いたことか計り知れません。共にアマチュアという立場からでしょうか、心の通い合うかけがえのない人でした。

三河昆虫研究会の会誌では、松野さんは松野光恭氏との共著で1975年と1976年に「東三河の食葉性コガネムシ」として、調査結果をまとめたものがあります。これは各方面で活用される貴重な資料となっています。また、1976年には「段戸山でエゾゼミを採集する」や、1984年には伴憲隆氏と共著で「カバイロアシナガコガネ作手村に産す」などがあります。同年には竹内克豊氏と共著で「愛知県下におけるマダラクワガタの採集例」や、「オオチャイロハナムグリを段戸山裏谷で採集」など興味深い種についての報告もされています。これらは地域の昆虫の魅力を一段と高めるものでした。さらに、オオヒラチャイロコガネの本宮山における生態についての記録をはじめ、愛知県のミツギリゾウムシ、オオチャイロハナムグリの再発見や、県下初のカバイロアシナガコガネ、ヒラタアオコガネ、ジュウヒチホシハナムグリや、稀種のムラサキツヤハナムグリ、オニクワガタの記録もされています。



写真1 松野さん採集の三重県御在所岳のル
イスクビナガハムシの標本



写真2 松野さんとよく歩いた豊橋市の石巻山登山道



写真3 虫捕り名人紹介の新聞記事。手前が松野さん、奥が浅岡孝知さん（中日新聞，1990，7，26）



写真4 松野さんと通った新城市市川



写真5 松野さん採集の標本、御在所岳産コガタカメノコハムシ（左）と段戸山産のミドリカメノコハムシ（右）

男のロマンを求めて三河の山野を駆け廻っていた松野さんの勇姿は、今も眼に焼きついていません。また、郷土の市町村史でも大平仁夫先生らと共に取り組まれていました。1980年出版の「豊根村の動物」、1996年出版の「設楽町誌」と、「稲武町史」など、これらの調査を松野さんと一緒に行った思い出は捨てがたいものです。いつもにこやかで、大自然の中での虫談義に明け暮れていた日々は、つい昨日のようです。これら松野さんが残された多くの記録は、この地方の昆虫を知る上からも欠かせない存在として、永遠に生き続けることでしょう。

松野さんは、昆虫の中ではクワガタムシの採集と飼育にかけては名人級で、私など足元にも及ばない存在でした。晩年にかけては、この特技を生かしてクワガタムシを扱う「マツノインセクト」を立ち上げ、国内有数の評判を勝ち取り事業に専念して生き生きと過ごされていました。このユニークさが受けて、時のテレビや新聞に登場することも少なくありませんでした。大好きなクワガタムシと共に多忙な日々でしたが、虫たちとの至福の時間に満ちていたかと思います。そんな松野さんでしたが、残念ながら蝉時雨の時節と共に、帰らぬ人となってしまいました。素晴らしい虫友に、心から感謝を込めてご冥福をお祈りしたいと思います。

ヒョウモンチョウ類5種類の小呂湿地における出現期について (その3)

杉坂 美典

1 はじめに

私は岡崎市にある小呂湿地にて、3年計画で9月中旬から10月中旬にかけて定点調査を行うことを決め、今年がその3年目になった。そこで、2017年の調査結果、および3年間の調査結果をまとめ、関係諸氏からの情報の提供やご指導・ご意見を賜りたいと思う。

2 調査場所：愛知県岡崎市小呂町小呂湿地

3 調査時間帯：晴天（雲量8以下）時の午前10時前後

4 調査方法

湿地の周辺を飛翔していたり、花に飛来したりしている個体を同時時間帯で確認し、写真撮影することによって個体の特徴を確認し、重複してカウントしないように注意する。

5 調査日：2017年の調査日は、(表1)の通りである。

6 種ごとの調査結果

(1) オオウラギンスジヒョウモン

①記録日と個体数 ・記録なし

(2) ミドリヒョウモン

表1 2017年の調査日

9月19日	9月24日	9月27日	9月29日
9月30日	10月8日	10月11日	10月18日
10月20日			



写真1 ミドリヒョウモン ♂

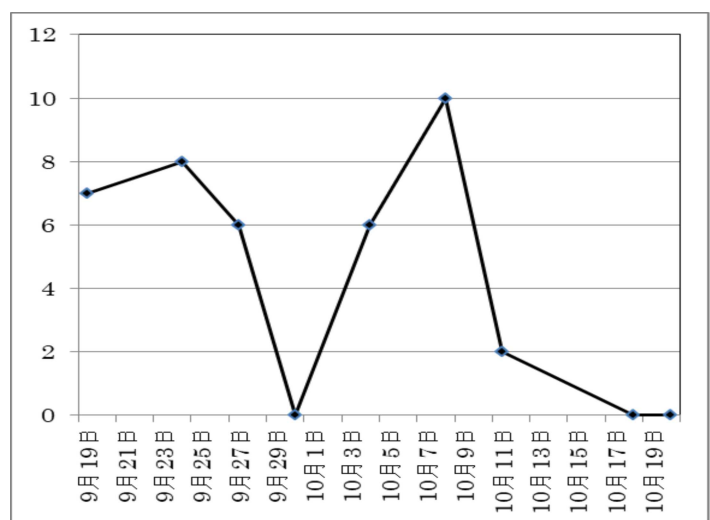


図1 ミドリヒョウモンの出現数の変化

① 記録日と個体数

- ・ 9月19日 6 ♂♂ 1 ♀
- ・ 9月24日 7 ♂♂ 1 ♀
- ・ 10月 4日 5 ♂♂ 1 ♀
- ・ 10月 8日 8 ♂♂ 2 ♀♀

- ・ 9月27日 6 ♂♂
- ・ 9月30日 記録なし
- ・ 10月11日 2 ♂♂
- ・ 10月18日 記録なし
- ・ 10月20日 記録なし

② 出現数の変化図1は、ミドリヒョウモン(写真1)の出現数の変化のグラフである。

(3) メスグロヒョウモン

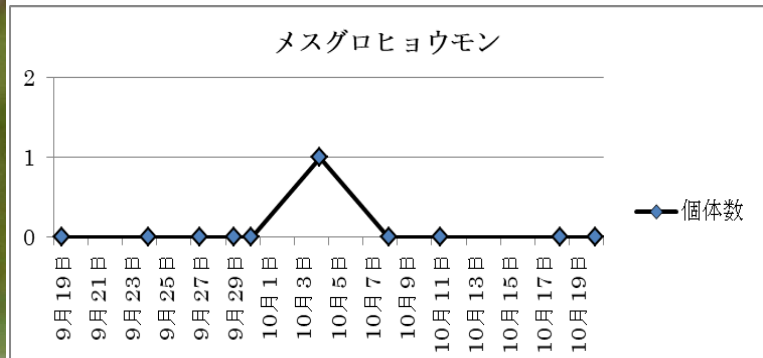


図2 メスグロヒョウモンの出現数の変化

写真2 メスグロヒョウモン ♀

- ①記録日と個体数：10月 4日 1 ♀
- ②出現数の変化：2017年は，1頭を確認できただけであった。

(4) ウラギンヒョウモン

- ① 記録日と個体数：記録なし

(5) ツマグロヒョウモン

- ①記録日と個体数
 - ・ 9月19日 1 ♀
 - ・ 9月24日 1 ♀
 - ・ 9月27日 1 ♀
- ②出現数の変化

(図3) は，ツマグロヒョウモン写真3の出現数の変化のグラフである。

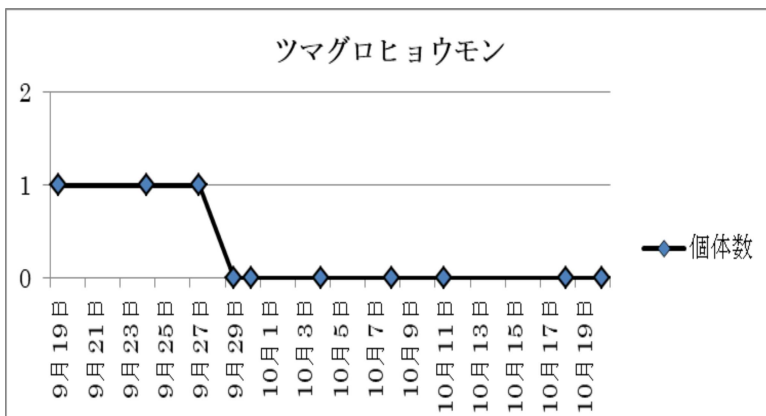


図3 ツマグロヒョウモンの出現数の変化



写真3 ツマグロヒョウモン ♀

7 結果

(1) 2017年の9月は天候がよく、9月中旬から多数のミドリヒョウモンが見られた。しかし、他のヒョウモンチョウ類は少なく、メスグロヒョウモン1♀、ツマグロヒョウモン1♀が現れただけであった。

(2) 表2は、2017年のミドリヒョウモンの出現数と岡崎市の最高気温、最低気温のデータである。図3はそれをグラフ化したものである。

表2 2017年のミドリヒョウモンの出現数と岡崎市の最高気温、最低気温

調査日	個体数	最高気温	最低気温
9月19日	7	29.1	15.7
9月24日	8	27.1	17.9
9月27日	6	27.1	19.6
9月29日	0	26.4	9.8
9月30日	0	26.2	13.1
10月4日	6	23.8	12.1
10月8日	10	28.1	15.7
10月11日	2	30.1	16.1
10月18日	0	20.7	13.3
10月20日	0	19.1	14.4

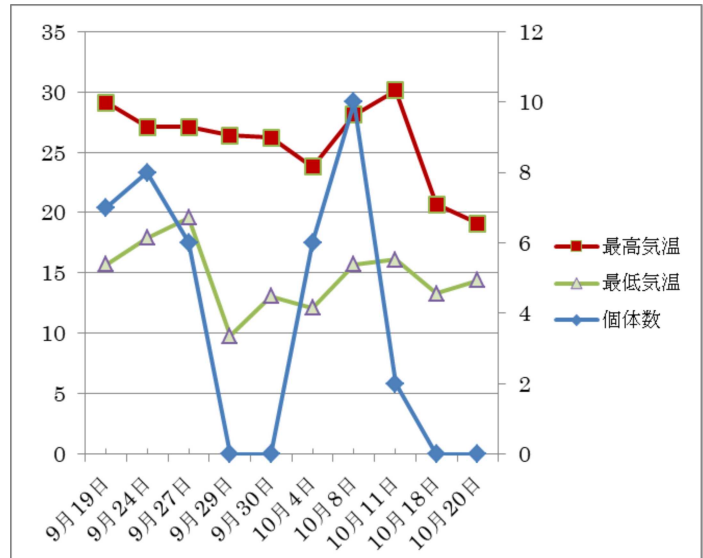


図4 2017年のミドリヒョウモンの出現数と岡崎市の最高気温、最低気温

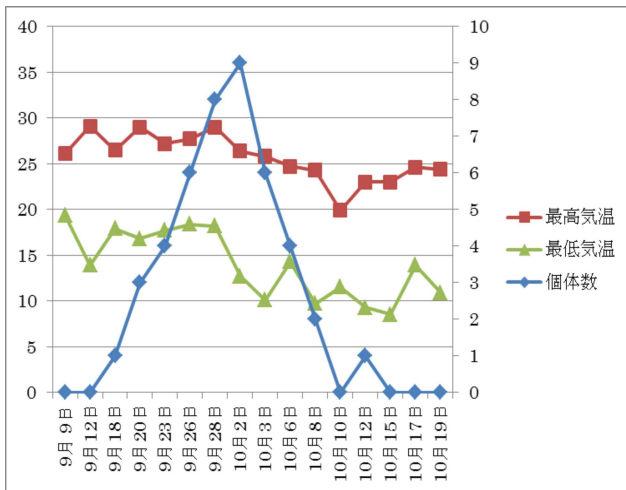


図5 2015年のミドリヒョウモンの出現数と岡崎市の最高気温、最低気温

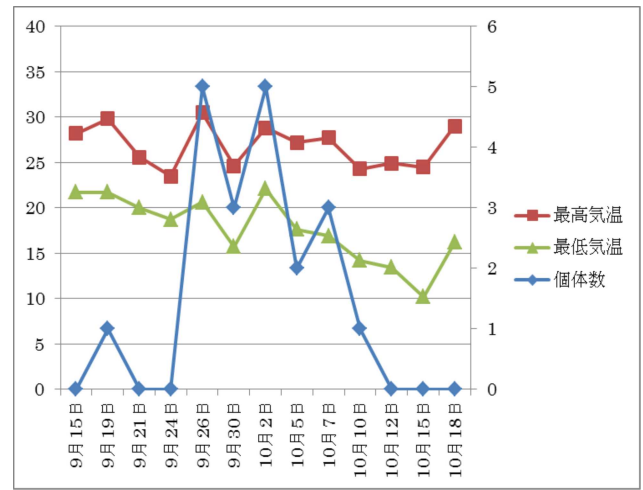


図6 2016年のミドリヒョウモンの出現数と岡崎市の最高気温、最低気温

8 考察

- ・ 図3は2017年，図4は2015年，図5は2015年のミドリヒョウモンの出現数と岡崎市の最高気温，最低気温のデータをグラフ化したものである。
- ・ 2017年の9月の中旬は，気候が安定しており，夏眠から覚めたミドリヒョウモンが，小呂湿地に

は数多く集まっていた。しかし、9月29日に突然、寒波が襲い、最低気温が10℃を切ってしまった。その影響で、29日と30日は、全く見つからなかった。死んでしまったのだろうか心配したが、4日後の10月4日には、5♂♂1♀が姿を現した。写真を撮って確認したところ、寒波の前後で、同じ個体が確認でき、低温のために小呂湿地に飛来しなかったことが分かった。

- ・例年は、10月2日前後が出現のピークになる。それは、そこ頃から最低気温が、15℃を下回るようになるためであるが、2017年は、10月11日になっても15℃以上あり、8日には8♂♂2♀♀、11日には2♂♂を確認することができた。ここまで多数の個体が生存できたのは、最低気温が下がらなかったことによるものと思われる。
- ・2015年と2016年の結果から、9月になって最低気温が18℃を下回るようになると夏眠から覚めはじめると考えられ、飛来する個体は、9月の終わりから10月上旬に最も多くなることが分かった。
- ・この3年間では、10月12日が最終の記録となっており、最低気温が15℃を下回るようになり、夜間の体温低下によって死滅する個体が多くなるとと思われる。
- ・夏眠後の成虫の生存期間は、写真の個体識別によって、10日間程℃であることが分かった。
- ・ツマグロヒョウモンは、最低気温が10℃を下回っても生存でき、岡崎市内では、11月での記録は多く、1999年12月2日に新鮮な個体が記録されており、小呂湿地でも同様に晩秋になっても出現していると思われる。
- ・オオウラギンスジヒョウモンは、2015年には、のべ6頭が見られたが、2016年は1頭で、2017年には全く見られなかった。今後は、どうなるか心配でならない。
- ・ウラギンヒョウモンは、2015年に1頭、35年ぶりに確認ができただけである。

9 おわりに

2017年の秋は、晴れの日が続いたり、雨の日が2週間も続いたり、急に寒波がやってきたりして、これまでの秋とは違う状況になった。しかし、ミドリヒョウモンやツマグロヒョウモンは、その環境の変化に適応し、これからも生き延びていける種であり、ウラギンスジヒョウモン、ウラギンヒョウモン、クモガタヒョウモンなどは、適応が難しい種なのであろう。

僅か50年間で、ヒョウモンチョウ類の分布の様子は大きく変わった。今後は、さらに変化し、ミドリヒョウモンとツマグロヒョウモンしかいない状況になるような気がしてならない。

これで3年間の定点継続観察を終えるが、今後も小呂湿地の環境を見守っていきたいと思う。

10 文献

杉坂美典,2017.ヒョウモンチョウ類5種類の小呂湿地における出現期について。その2。三河の昆虫 No.64 : 885.

杉坂美典,2016.ヒョウモンチョウ類5種類の小呂湿地における出現期について。三河の昆虫 No.63 : 858.

杉坂美典,2016.岡崎市の蝶。杉坂美典ホームページ。 < <http://sugisaka.sakura.ne.jp/> >

杉坂美典,2014.レッドデータブックおかげき 2014 : 286-287. 岡崎市.

(ホームページ : <http://sugisaka.sakura.ne.jp/>)

(E-Mail : sugiyosi@sinfonia.or.jp)

モンクチビルテントウの東三河における分布について

山崎 隆弘



写真1 愛知県豊橋市産
モンクチビルテントウ



写真2 今回モンクチビルテントウを採集した
豊川市佐脇原佐奈川河川敷

モンクチビルテントウ *Platynaspidius maculosus* (Weise, 1910) は、体長 3.0 mm 前後の小型種である。従来、中国・台湾・ベトナムに分布するものであるが、日本からは 1998 年に松原豊氏ほかによってモンマダラテントウの和名で沖縄本島から記録したのが最初である。本種は 2003 年に佐々治寛之氏ほかによって和名がモンクチビルテントウに改称されている。日本本土からは 2006 年に鹿児島から今坂正一氏によって九州で初めての記録がなされ、さらに 2010 年には城戸克弥氏が福岡からケヤキから記録されている。本州から初めての記録は石川均氏によるもので、2011 年に静岡市内の家庭菜園のソラマメから得られたとある。2013 年には日下部良康氏が神奈川県小田急江ノ島線中央林間駅エノコログサの生える草地から、偶然に見つけた事例が報告されている。筆者も 2015 年に静岡市清水区の各地から神社の草地や、河川敷の灌木、港の僅かな緑地でのスーピングで採集している一度に得られるのは 2-3 頭程度であった。また、2015 年に齊藤琢己氏が大阪市の淀川河川公園で、エノキの幼木からの採集報告があり、2017 年には田中馨氏が山口県における最初の記録がなされた。このように、現在は西日本から関東南部にかけて、点々と分布が明らかになってきた種である。本種の進入経路は明らかではないが、人為的な事由によるものか、気候の変化によるものか、生態的にも興味深い種である。

愛知県からは筆者が 2017 年には豊橋市多米町から記録をしているが、今回新たに見出すことができたのでここに記録しておきたい。まだ得られた場所も限定的ではあるが、当地域では定着しているものと思われる。

末筆ではあるがご指導とお世話になっている大平仁夫博士、三河生物同好会会長の浅岡孝知氏に心から感謝をしたい。

〔採集記録〕

1ex.,愛知県豊橋市浜道町, 30.VII. 2017. 筆者採集.

3exs.,愛知県豊川市佐脇原佐奈川河川敷, 15.IX. 2017. 筆者採集.



写真3 今回新しくモンクチビルを採集した豊橋市南部の浜道町の環境および観察会の様子

引用文献

日下部良康,2013.モンクチビルテントウの神奈川県からの記録. さやばね N.S.(12):59-60.

今坂正一,2006.九州初記録のモンクチビルテントウ. 月刊むし(425):45.

石川 均,2011.静岡県初記録のモンクチビルテントウ. 月刊むし(487):46.

城戸克弥,2010.福岡県におけるモンクチビルテントウの越冬. 月刊むし(475):47.

松原 豊・上野輝久・佐々治寛之,1998.日本未記録のモンマダラテントウ沖縄本島に産す. 月刊むし(332):38.

齊藤琢己,2015.大阪府におけるモンクチビルテントウの記録. 月刊むし(538):12-13.

佐々治寛之・谷口昌弘,2003. 日本未記録のモンクチビルテントウ(改称). 月刊むし(391):13.

田中 馨,2017.山口県でモンクチビルテントウを採集. 月刊むし(551):59.

山崎隆弘,2017.ビオトープの昆虫・コウチュウ目テントウムシ科. 豊橋市多米滝ノ谷ビオトープ自然環境調査報告書(1999-2016), : 48-51.

愛知県田原市でスナアカネとハネビロトンボを記録

吉鶴 靖則・吉田 雅澄・川田 奈穂子

1 はじめに

スナアカネ *Sympetrum fonscolombii* (Selys) は日本では主にユーラシア大陸から飛来する迷入種と考えられ、北海道から九州、南西諸島までと、広く記録が点在している(尾園ほか, 2012)。今回、愛知県の同一ヶ所において3年連続で記録でき、スナアカネにとって良好な生息環境と生態を考える上で重要と思われたので、ここに報告する。また、同一ヶ所で見られた迷入種のハネビロトンボ *Tramea virginia* (Rambur) もあわせて報告する。

2 記録

スナアカネ

愛知県田原市白浜一号, 13-X-2013, 1 ♂ (採集: 吉田); 19-X-2014, 3 ♂♂ 1 ♀ (撮影・目撃: 川田(写真1)・吉鶴); 24-X-2014, 2 ♂♂ (撮影: 吉鶴); 25-X-2014, 1 ♂ (撮影: 川田); 6-X-2015, 2 ♂♂ 1 ♀ (撮影・目撃: 吉鶴)

ハネビロトンボ

愛知県田原市白浜一号, 24-X-2014, 1 ♂ (撮影: 吉鶴(写真2))



写真1 スナアカネ オス (撮影: 川田)



写真2 ハネビロトンボ オス (撮影: 吉鶴)

3 環境

飛来地の環境は、三河湾干拓事業で埋め立てられて造成された陸地で、長年開発から取り残されていたところに雨水がたまり、確認時の水深は深いところで 90cm 前後、スナアカネが多かったところで 40 ~ 50cm 前後となった水域である(写真3)。三河湾に面しており、写真3の手前および左側の角ばったところはソーラーパネルで、奥と右側の不規則な形状が開放水面の水域である。確認した水域と三河湾との距離は約 300m で、海拔は約 0m である。繁茂していた植物はヨシ *Phragmites australis* (Cav.) Trin. ex Steud. やガマ *Typha latifolia* L. などであった。開放水面と植物の境目ぐらいにスナアカネのオスが縄張りを形成し(写真4)、ハネビロトンボは活発に飛び回って

いた。海岸近くの開放的な池沼では、ハネビロトンボがよく飛来する池での記録が注目されているが（山本ほか，2009），今回はまさにこの条件が当てはまる状況であった。この他，同所的に見られたトンボは，下記の通りである。

アオイトトンボ	<i>Lestes sponsa</i> (Hansemann) (吉田, 2016)
クロイトトンボ	<i>Paracercion calamorum calamorum</i> (Ris)
ムスジイトトンボ	<i>Paracercion melanotum</i> (Selys)
アオモンイトトンボ	<i>Ischnura senegalensis</i> (Rambur)
ギンヤンマ	<i>Anax parthenope julius</i> Brauer
タイワンウチワヤンマ	<i>Ictinogomphus pertinax</i> (Selys) (吉田ほか, 2014)
チョウトンボ	<i>Rhyothemis fuliginosa</i> Selys
リスアカネ	<i>Sympetrum risi risi</i> (Selys)
ノシメトンボ	<i>Sympetrum infuscatum</i> (Selys)
コノシメトンボ	<i>Sympetrum baccha matutinum</i> Ris
マイコアカネ	<i>Sympetrum kunckeli</i> (Selys)
ショウジョウトンボ	<i>Crocothemis servilia mariannae</i> Kiauta
ウスバキトンボ	<i>Pantala flavescens</i> (Fabricius)
シオカラトンボ	<i>Orthetrum albistylum speciosum</i> (Uhler)

トンボ以外ではウシガエル *Rana catesbeiana* Shaw のオタマジャクシとヒルの仲間が水中にたくさん見られた。また，ヨシ原環境の良好さを示すように，高次捕食者である猛禽類のチュウヒ *Circus spilonotus* Kaup も確認できた。

4 生態

観察はいずれも晴天時に行った。オスは午前中活発に飛び回り，同種だけでなく，ショウジョウトンボともよく争っていた。概ね 11 時半以降には開放水面に近いヨシやガマにとまるようになった。オスが縄張りを形成する開放水面は広いところが多かったが，3m 四方ほどの小さなところもあった。この時間帯にメスは一度も発見できず，どのように過ごしているのかは不明である。メスを発見したときは，いずれもヨシ原から開放水面に出てきて産卵を行うときであった。



写真3 蔵王山からの干拓地の遠望（撮影：吉鶴）

5 配偶行動

連結と単独の両方で打水産卵を行うことは知られていたが（尾園ほか，2012），時間等の記述がない部分の補足を兼ねて，筆者の観察例を記録しておく。

2014 年 10 月 19 日は連結打水産卵を目撃した（写真 5）。前後に撮影したデジタル写真の時間などから割り出すと，このペアは 11 時 55 ～ 58 分ごろに奥のヨシ原から連結状態で飛び出して開放水面に飛来し，開放水面の広い範囲を飛びながら連結打水産卵を行っていた（写真 5）。写真 5 は 12 時 3 分に撮影している。産卵後は上空に一気に昇り，その途中で連結を解消したが，これは 12 時 5 ～ 12 分ごろである。連結解消後，オスとメスは別々の方向へ飛び去り，オスは開放水面に戻り，メスは高度 10m 前後まで上昇後，高度を下げて奥のヨシ原に戻っていった。その途中で交尾した

オスとは異なる2頭のオスにアプローチされたものの、どちらのオスとも交尾を拒否している。

2015年10月6日は13時10分ごろにメスの単独打水産卵を目撃した。産卵場所は当初開放水面に面したヨシ原の横に近いところで産卵していたが、その後、次第にヨシ原の中で産卵するようになり、逃げ込まれて見失い、撮影できなかった。この間わずか2分ほどで、産卵とヨシへの静止を小刻みに繰り返していた。



写真4 ヨシ原とその中の開放水面。手前の折れたヨシにスナアカネのオスがいる (撮影：吉鶴)

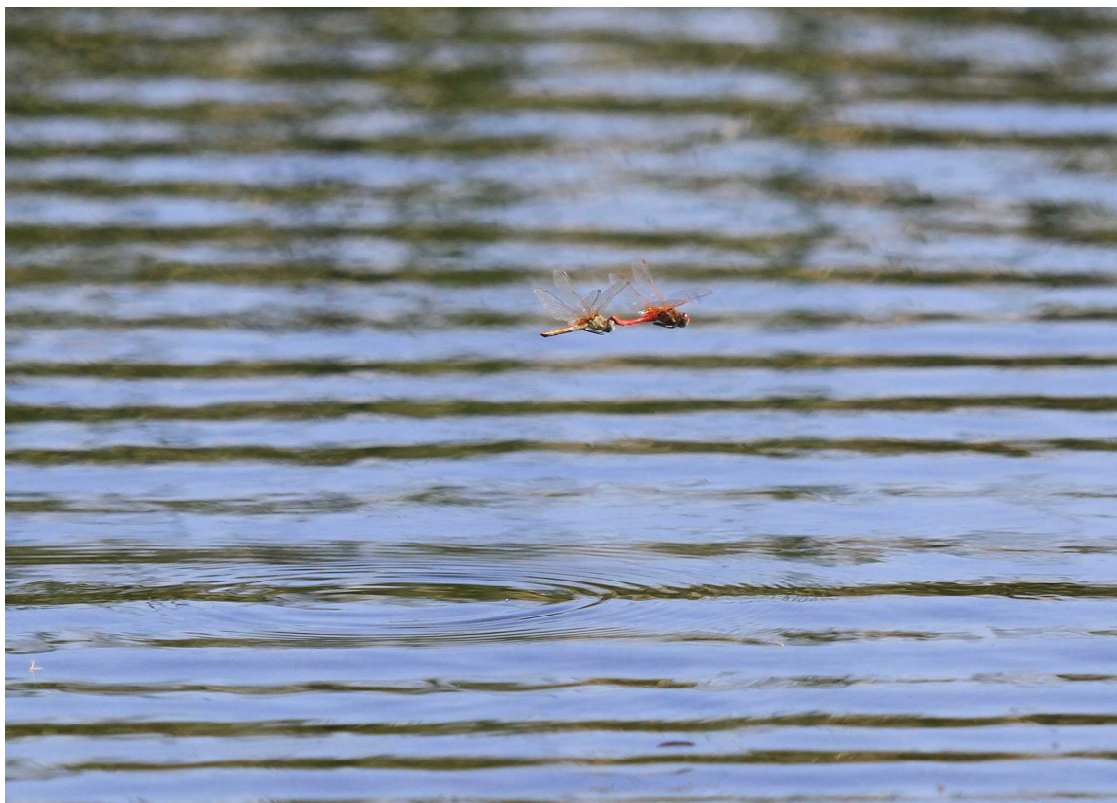


写真5 スナアカネの連結打水産卵。打水した後の波紋が左下に見える。(撮影：吉鶴)

6 考察

表1 スナアカネの確認状況

	未 確 認	確 認	未 確 認
2013年	データなし	10月13日(吉田)	10月27日(吉田)
2014年	データなし	10月19・24・25日(川田・吉鶴)	10月28日(吉田)
2015年	9月20日(吉田)	10月6日(吉鶴)	10月12日(吉田)
2016年	増水により、渡来地に立ち入れず。見た範囲内では確認できず(吉田)		
2017年	埋め立てにより渡来地が消滅(川田)		

スナアカネの確認状況を表1に示す。確認できたのは2013～2015年の3年連続である。

同一個体が同一水域で4日間観察されたことがあるため(杉村ほか, 2008), 断片的ではあるが最も個体数が多かった2014年に個体識別を試みた。しかし, 翅の損傷場所で個体識別するとすべて異なる個体で, 最大6オス1メス確認したことになった。連続して7日間見られた個体は確認できなかった。ただし, 2014年10月19日は, 吉鶴と川田が別々に撮影していた結果, 未撮影の個体が他にも2頭いる可能性があった。この未撮影の個体と後日撮影した個体との関係は不明である。未確認の日は, 水域の範囲が広大だったために近辺の違うところへ移動していた可能性と, 移動性が強い種のために個体が入れ替わっている可能性の両方が考えられた。しかし, 確認できた日とできなかった日を繰り返していることから, 個体が入れ替わっている可能性があると思われた。

鹿児島では毎年のように見られ(山本ほか, 2009), 一時的な発生もあったという(杉村ほか, 2008)。今回確認した個体はいずれも翅の欠損や質感からは未成熟とは考えられなかった。したがって, 今回は発生を示す証拠を見出すことはできず, 飛来の可能性が高いと考えられた。ただし, 複数個体が確認できたこと, 3年連続で見られたことから, 環境が整っていれば, ある程度の飛来が見込め, 卵期7～15日, 幼虫期75～196日とされていること(吉田, 2014), 産卵行動が見られたことから, 初夏の飛来個体があれば発生する可能性があると考えられた。

7 引用文献

- 尾園 暁・川島逸郎・二橋 亮, 2012. スナアカネ. ネイチャーガイド 日本のトンボ. 372-373. 文一総合出版. 東京.
- 杉村光俊・小坂一章・古田一夫・大浜祥治, 2008. スナアカネ. 中国・四国のトンボ図鑑. 222-223. いかだ社. 東京.
- 山本哲央・新村捷介・宮崎俊行・西浦信明 (2009) スナアカネ. 近畿のトンボ図鑑. 197. いかだ社. 東京.
- 吉田雅澄, 2014. 飼育による日本産トンボの卵・幼虫期. *Aeschna*. (50): 1-12. トンボ研究会.
- 吉田雅澄・八木孝彦・鶴殿清文, 2014. 東海地方3県におけるタイワンウチワヤンマの分布拡大, 第3報. *Aeschna*. (50): 73-77. トンボ研究会.
- 吉田雅澄, 2016. 愛知県市町村別トンボ分布表 2015. *Aeschna*. (52): 55-60. トンボ研究会.

愛知県豊橋市南部で見られるようになった昆虫(2017)

浅岡 孝知

愛知県豊橋市は愛知県の南部に位置している。南は遠州灘、東部は低山・丘陵地、北部は豊川を挟んで豊川市と接している。また、西部は田原市と接している。豊橋南部では、タイワンタケクマバチは数年ほどで普通種のようになり、フジの花に飛来するクマバチ類の7割に達し、旧来のキムネクマバチは3割くらいである。ここでは、自宅のある南部天伯町での最近の様子をカメムシ類と甲虫類について、例を挙げて紹介する。年の記していないのは全て2017年産である。

カメムシ目 HEMIPTERA

・ナガカメムシ科 Lygaeidae

ヒメマダラナガカメムシ *Graptostethus servus* (Fabricius,1787). 1ex.20-XI.2014.

本種は体長8mm前後であり、普通は海浜のハマヒルガオでよく見いだされる種である。豊橋市では、細谷町・小島町などで記録、確認している。しかし、少し内陸部での記録がないように思われる。今回1個体だけであるが確認できた。どのくらいの内陸でも見出されるのか興味がある。(写真1)

クロツヤナガカメムシ *Lamproplax membranea* Distant,1883. 1ex.4-V.

本種は体長5mm前後である。1個体を確認したが、その後日にも1個体を見出すことができたので、豊橋市内での記録はないが普通に生息しているのではないかと思われる。雑草間に生息している。(写真2)

・ヘリカメムシ科 Coreidae

ミナミトゲヘリカメムシ *Paradasynus spinosus* Hsiao,1963. 1ex.14-V. 1ex.29-IX.

本種は体長20mm前後である。オオクモヘリカメムシに似ているが、前胸背の側角が著しく発達しているので区別は容易である。オオクモヘリカメムシはネムノキで得られるが、本種は花に飛来したり、葉上に静止したりしている。東三河地方では、筆者は1980年代に旧御津町で初めて確認している。その後、旧作手村や本宮山でも確認している。本種は東三河よりむしろ西三河地方に多く産するようであり、その報告例も散見される。市内の記録がないが、天伯町では春秋ともに見出しているのだからかなり普通になっている。(写真3)

コウチュウ目 COLEOPTERA

・カミキリムシ科 Cerambycidae

フタオビミドリトラカミキリ *Chlorophorus muscosus* (Bates,1873). 1ex.30-VI.

本種は体長12mm前後である。豊橋市では以前から記録があり、高塚町・多米町・大岩町でも確認しているが、それほど個体数は多くはなかった。ここ数年は毎年天伯町でも確認できるようになった。海浜部だけでなく内陸部まで分布を広げている。(写真4)

・ハムシ科 Chrysomelidae

ヨツモンカメノコハムシ *Lacoptera quadrimaculata* (Thunberg,1789). 1ex.24-X

本種は体長8mm前後である。豊橋市の記録は、浅岡(2017)に報告したように多米町であるが、

その後調査をしてみると天伯町でも何度も確認できる。サツマイモの害虫で拡散が心配である。(写真5)

参考文献

浅岡孝知(2017)豊橋市多米町(滝ノ谷)ビオトープの2017の記録. 蟲譜 56(1). 24. 三河生物同好会.

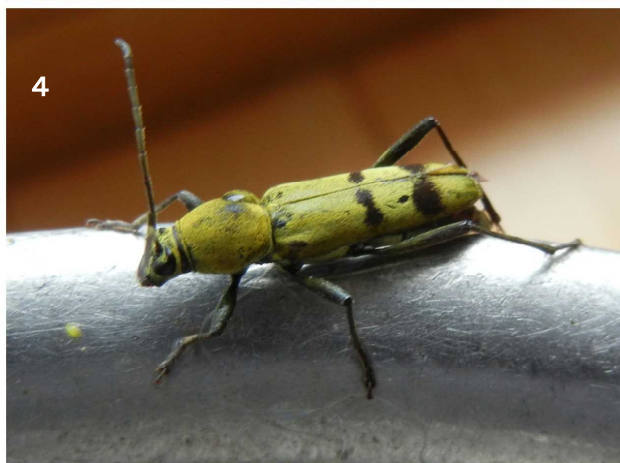
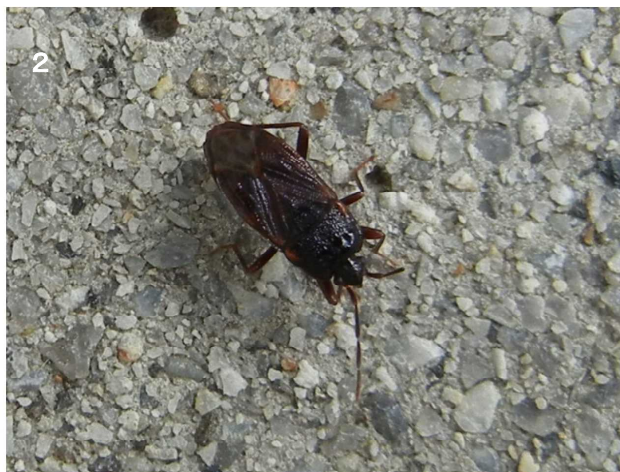
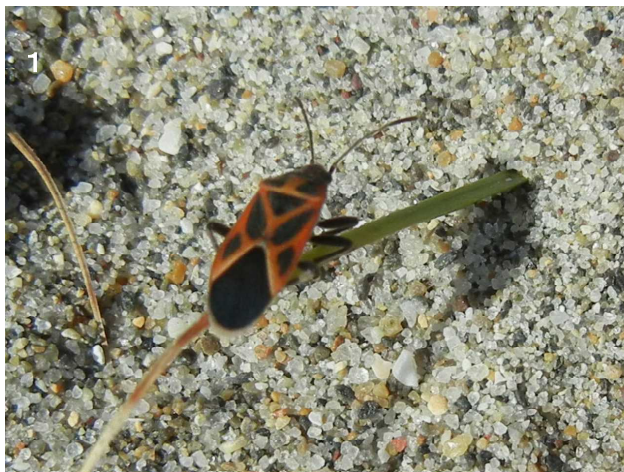


写真1 ヒメマダラナガカメムシ

写真2 クロツヤナガカメムシ

写真3 ミナミトゲヘリカメムシ

写真4 フタオビミドリトラカミキリ

写真5 ヨツモンカメノコハムシ

※写真1のみ旧赤羽根町, その他は豊橋市天伯町撮影.

豊田市足助地区のヤマトスジグロシロチョウの記録

大曾根 剛

愛知県のヤマトスジグロシロチョウ *Artogeia nesis japonica* Shirôzu (=旧エゾスジグロシロチョウ *Pieris napi japonica* Shirôzu) は、平野部～山地帯まで記録が見られるものの局地的に分布し、成虫で外観上のスジグロシロチョウとの区別がしにくいことや、近年の分子生物学の DNA 解析での分類で種として分離されたため、確証のある同定で県内での確実な分布地や記録地が示された例はまだ少ない。

豊田市内の本種の分布は以前より旭地区の浅谷周辺の阿妻川や明智川の上流部やその支流に広く分布していることが知られており、田中(1976)はこの付近のスジグロシロチョウとの混生とその区別点や食草との関係の問題提起している。また、南山大学生物学教室の阿江茂教授は、この地の本種を材料にしてヨーロッパ産 *Artogeia* 属と人工交雑を実施してその種間関係を調査しており、筆者も構内の飼育室でその状況を見せて頂いたことがあった。しかし、豊田市内の筆者の調査では、旭地区内の各町、名倉川下流部や大野瀬町以外で記録された以外は、旧エゾスジグロシロチョウとして報告された点在的な記録だけで、ヤマトスジグロシロチョウとして明記された記録を知らない。

2017年4月22日、筆者は豊田市足助地区の大河原町(119m)のヤマハタザオの自生地で、本種と判断される♀の産卵行動を目撃した。その時はこの個体の種名確認のために何回も繰り返して観察する程度に終わったが、帰宅後、足助地区の正式な記録がないことが気になって、5月10日に同地を再訪し、現地のヤマハタザオより8頭の1齢幼虫を採集した。

幼虫は3齢までは葉裏に静止していたが、成長に従い主に茎や葉表にも静止した。飼育して間もなくヤ



写真1 ヤマトスジグロシロチョウ終齢幼虫と蛹 左：旭一色産 右：足助大河原産

上：終齢幼虫背面，中上：同側面，中下：蛹背面，下：同側面



写真2 羽化した第2世代成虫♂♀（足助大河原産） 左：右翅表面，右：左翅裏面

マハタザオの葉が無くなったので、キャベツを与えて順調に生育し、蛹化した。スジグロシロチョウが混じっていることも考えられたため、幼虫と蛹の形態を全て写真撮影で記録した。これを以前に筆者が飼育した旭地区一色町産の幼虫および蛹の写真および8♂♂9♀♀の成虫の標本と比較して外観上の比較を試みたが、特に顕著な差違を見いだせなかった(写真1)。

成虫は2017年5月31日～6月3日に3♂♂4♀♀が羽化した。いずれも典型的な本種の第2世代(夏型)の形態的特徴を持つ個体であった(写真2)。また、1頭のみ成長が遅い幼虫がいたので、5月24日から冷蔵庫の暗所に入れて室温16℃下で飼育したところ、6月16日に1♂が羽化した。この個体は翅脈上に黒色状斑紋が発達し翅形が横長の特徴を持つ第1世代(春型)と、今回の第2世代(夏型)の中間的な特徴を持っていた(写真3)。



写真3 同成虫♂(短日処理)足助大河原産 左：右翅表面，右：左翅裏面

引用文献

田中蕃, 1976. *Pieris* 雑記. 佳香蝶. 28(105):11-15. 名古屋昆虫同好会.

三河湾佐久島におけるコマルケシゲンゴロウの記録

市川 靖浩

コマルケシゲンゴロウ *Hydrovatus acuminatus* Motschulsky, 1859 (写真1) は、体長 2.0 ~ 2.5mm の小型のゲンゴロウである。本種は国内では本州 (福島県以南)・四国・九州・南西諸島, 国外では台湾・東南アジアおよびインドからイランまで広く分布する (森・北山, 2002)。主な生息環境は池沼や湿地, 水田などの水生植物が豊富な環境であるが, 近年は開発や水田の乾田化・草地化などにより生息地が減少しているため, 環境省のレッドデータブック (環境省, 2015) では準絶滅危惧 (NT) に選定されている。

筆者は三河昆虫研究会と西三河野生生物研究会が合同で開催した 2017 年度の第 4 回採集・観察会で佐久島へ渡航した際に, 島内において本種を採集した。愛知県における本種の記録は美浜町 (佐藤, 1971), 豊田市 (豊田市生物調査報告書作成委員会, 2016) の報告があるのみである。さらに三河湾島嶼のゲンゴロウ類は, これまでに 8 種しか確認されていない (市川, 2016)。愛知県における本種の分布は非常に局地的であり, かつ, 三河湾の島嶼における分布は極めて貴重であるため以下に記録を報告する。

今回の採集・観察会で島内を同行していただくとともに, 三河湾の島嶼における昆虫相についてご教示いただいた三河昆虫研究会副会長の山崎隆弘氏に心よりお礼申し上げます。



写真1 佐久島秋葉山産 4-VI-2017

[採集記録]

6exs., 4-VI-2017, 西尾市一色町佐久島秋葉山, 市川靖浩採集・保管。



写真2 前胸腹板の突起

なお, 佐久島におけるゲンゴロウ類は, 本種を加えたことにより 9 種が確認されたことになる。

引用文献

市川靖浩, 2016. 三河湾佐久島の水生昆虫. 鳳来寺山自然科学博物館報 (45) : 31-36.

環境省, 2015. レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—5 昆虫類. 509pp.,

ぎょうせい.

森 正人・北山 昭, 2002. 改訂版 図説日本のゲンゴロウ. 231pp. 文一総合出版.

佐藤正孝, 1971. 知多半島の水生甲虫類. 日本昆虫学会東海支部報, 24 : 2-3.

豊田市生物調査報告書作成委員会, 2016. IX昆虫. 豊田市生物調査報告書<分冊その2>. 379pp.

豊田市環境部環境政策課.

渡部晃平, 2016. 石川県におけるマルケシゲンゴロウ属の分布. さやばねニューシリーズ, 24 : 53-56.

日本甲虫学会.

長野県平谷村のムラサキツバメ 7月の記録

大曾根 剛

2017年7月15日, 筆者は長野県下伊那郡平谷村平谷でムラサキツバメ *Narathura bazalus* 1 ♀を採集したので報告する.

長野県内の本種の記録は2004年に長野市で成虫が採集されて以来, その後は飯田市, 下伊那郡松川町や駒ヶ根市, 東筑摩郡朝日村, 坂城町, 長野市で発生が確認されているが, その記録はいずれも盆地の平坦部で, 時期は7月下旬以降のようである.

今回の採集地点は治部坂峠の登り口, 矢作川の源流部に近い靱(うつぼ)と呼ばれた地点(標高972 m)で, ムラサキシジミよりも一回り大型の蝶が, 沢沿いの旧道に生える低木の間を緩やかに飛翔し

てきたので, 確認のために採集した. 写真のように左後翅後角部と尾状突起がなく, 全ての翅に微小な破損や擦れが見られるため, 羽化後から時間を経過していると思われるが, 同定は十分に可能な個体であった. 長野県内の記録としては, 現在のところでは最も標高の高い地点と思われた.

通常記録よりもやや早い時期に, このような食樹のない高標高の沢地で成虫が確認されたことは, 愛知県内や近県の山間地の内陸部でも全く記録が全く出ていないことから, 暖地沿岸部の発生地からの移動個体ではなく, 近隣で既に記録のある飯田市付近の低地からの移動個体であることが考えられる.



写真 平谷村産ムラサキツバメ♀

豊田市足助地区でキマダラカメムシを採集

市川 靖浩

キマダラカメムシ *Erthesina fullo* (Thunberg, 1783) (写真1) は、サクラやカキなど 25 種類の植物に幼・成虫が寄生する台湾や東南アジア原産の外来種である (安永ほか, 1993)。近年、本州各地で発見例が増加しており、分布の拡大が注目されている (愛知県環境部自然環境課, 2012)。

愛知県では、2011 年に名古屋市で初めて発見され (矢崎, 2012)、その後、名古屋市内の各所、春日井市・犬山市・小牧市・尾張旭市、および瀬戸市など尾張地方で確認されている (河路, 2015)。矢崎 (2012) によれば、名古屋市で発見された個体は、名古屋市瑞穂区の瑞穂公園周辺の街路樹などの幹で多数確認され、植栽後間もないと考えられる樹皮に保護シートを巻いた若いハナミズキでも幼虫が観察されたこと、ハナミズキ上の個体数が圧倒的に多いことなどから、東京都心・埼玉県方面で生産された苗木によって持ち込まれたことを示唆している。

三河地方では 2014 年に豊田市で確認され (豊田市生物調査報告書作成委員会, 2016)、これが三河地方における本種の初見と思われる。筆者も同時期の 2014 年に豊田市内の前山小学校で採集されたキマダラカメムシを確認する機会を得ているが、この確認場所も市街地という立地においては尾張地方での発見事例に似ている。今回筆者は豊田市の市街地から離れた山間部の足助町において本種を採集しており、市街地以外の山間部からの発見は珍しいと思われるため、分布動向に関する知見としてここに記録しておきたい。

本報告にあたり、本種を発見し筆者に報告していただいた三宅学氏 (豊田市産業部農林振興室森林課) に心よりお礼申し上げる。

[採集データ]

豊田市足助町宮ノ後 : 1ex., 10-X-2017, 市川靖浩採集 ; 1ex., 27-X-2017, 三宅学採集。
標本は乾燥標本にして筆者が保管している。

本種の採集場所は、豊田市の中心市街地から直線距離で約 16 km 離れた豊田市役所足助支所の敷地内である。2 個体はそれぞれ別の日に発見されたが、ともに北庁舎の玄関付近の地面に静止しているところを採集された。本種を採集した日から数日、足助支所敷地内の樹木を調査したが、本種の発生を確認することはできなかった。キマダラカメムシは長崎地方では、冬季に成虫が越冬のため家屋に集まってくるといわれており (安永ほか, 1993)、足助町で採集した個体も庁舎建物を越冬場所にするために集まってきたものと思われる。

足助支所は愛知県屈指の紅葉の名所である香嵐渓を眼前に臨む場所に立地しており、庁舎の駐車場は観光客用にも利用されている。観光客の往来は自動車によるものがほとんどで、紅葉の時期には県内外から多くの観光客で賑わう。本種の侵入は新幹線などの公共交通機関 (奥田, 2016) や自動車 (河路, 2015) に付着した個体が都市部の発生地から移動していることが示唆されていることか



写真1 足助町宮ノ後産 10-X-2017

ら、今回発見された2個体についても観光客の自動車などに付着してきたか、もしくは植栽された樹木によって侵入したかもしれない。いずれにしても山間部での本種の分布に関する詳細は不明であるため、今後はその動向について注視していきたい。

引用文献

- 愛知県移入種データブック検討会(編), 2012. 愛知県の移入動植物—ブルーデータブックあいち 2012—, 225pp. 愛知県環境部自然環境課.
- 河路掛吾, 2015. 愛知県尾張地方のキマダラカメムシの発生状況. 佳香蝶, 67 (264) : 63-64. 名古屋昆虫同好会.
- 奥田恭介, 2016. 岐阜県でキマダラカメムシを確認. Rostria, (61) : 67-68. 日本半翅類学会.
- 豊田市生物調査報告書作成委員会, 2016. IX昆虫. 豊田市生物調査報告書<分冊その2>. 379pp., 豊田市環境部環境政策課.
- 安永智秀ほか, 1993. 日本原色カメムシ図鑑. 380pp. 全国農村教育協会, 東京.
- 矢崎充彦, 2012. 愛知県に侵入したキマダラカメムシ. 月刊むし, (491) : 41-42.

愛知県東海市でアカハネナガウンカを記録

吉鶴 靖則

はじめに

アカハネナガウンカ *Diostrombus politus* Uhler はオギ *Miscanthus sacchariflorus* (Maxim.) Benth. やススキ *Miscanthus sinensis* Andersson などのイネ科植物につく姿を目にする昆虫で、「愛知県の昆虫 (上)」によると尾張地方では春日井市や名古屋市での報告例はあるが、知多半島では記録されていない(堀ほか, 1990)。東海市での目撃は珍しいと思われるので、ここに報告する。



写真 アカハネナガウンカ

《データ》

愛知県東海市富木島町伏見4丁目, 21-VII-2017, 1ex. (写真)

この個体は21日20時45分ごろ、自宅の中に入り込んできたものである。灯火に飛来したのか、偶然かはよくわからない。生息環境は歩いて2分ぐらいのところの上野新川の河川敷の草地があり、ここから飛来したものと思われる。写真は翌22日にススキにとめて撮影し、このまま放虫した。

引用文献

- 堀 義広・浅岡孝知・原田猪津夫, 2012. 愛知県の頸吻亜目. 愛知県の昆虫 (上). 105-122. 愛知県農地林務部自然保護課.

愛知県北設楽郡設楽町段戸裏谷でオオシモフリスズメの追加記録

原田 究

オオシモフリスズメ *Langia zenzeroidea* は、信州伊那谷周辺より西に分布が知られるが、間野 (2005) によれば、豊田市自然観察の森周辺では、全国的に最も多く見られる地域となっている。愛知県では愛知県昆虫分布研究会 (1991) によれば、豊田市 (稲武町、東山町、足助町等) ・北設楽郡東栄町・豊根村などから記録はあるが、段戸裏谷の記録は筆者が本種 1 ♀ を 2016 年 5 月 8 日に採集するまでなかった (原田, 2017)。



写真1 2017年4月30日 設楽町段戸裏谷産

筆者はオオシモフリスズメの段戸裏谷の記録が遇産種なのか、それとも定着しているのかを確かめるため、2017年4月30日に昨年と同じ

場所の段戸湖駐車場付近の道路沿いでライトトラップを行ない 1 ♂ を得た。さらに、ライトトラップ設置場所から 80 m 程離れた豊川市が運営する野外センター「きららの里」の前の LED 灯で 1 ♂ を得た。どちらの雄も新鮮な個体であった。このことから、当地においてオオシモフリスズメは、遇産種ではなく段戸裏谷で定着していると考えられる。

筆者は 2017 年 4 月 18 日と 4 月 28 日にも、岸田 (2011) に西限として記載のある長野県下伊那郡下條村 (標高 500 m から 650 m) でも、道路沿いの水銀灯や LED 灯やコンビニエンスストアを回り、オオシモフリスズメの調査を行った。4 月 18 日にオス数頭と車に引かれた 1 ♀ を確認したが、28 日には全く観察できず、今年の発生は終了したようだった。

段戸裏谷の段戸湖駐車場付近の道路沿いや「きららの里」の標高は 850 m から 880 m 位なので、下條村との標高差を考えると、段戸裏谷ではオオシモフリスズメは 4 月末ごろにオスが発生を始め、ゴールデンウィークを挟んで 5 月 10 日前後にメスの発生ピークを迎えるものと推測している。

「きららの里」敷地内のサクラでも発生しているのではないかと筆者は考えているが、今年は幼虫が確認できる時期に段戸裏谷に足を運べなかったため、次年以降の調査に期待したい。

引用文献

間野隆裕, 2005. オオシモフリスズメの交尾, Rio No.84, 豊田市矢作川研究所.

岸田泰則, 2011. 日本産蛾類標準図鑑 I, 553pp. 学研.

愛知県昆虫分布研究会, 1991. 愛知の昆虫下, 愛知県農地林務部自然保護課.

原田 究, 2017. 段戸裏谷でオオシモフリスズメを記録, p.三河の昆虫(64)900. 三河昆虫研究会.

岡崎市北山湿地で外来種・ムネアカハラビロカマキリを観察

小鹿 亨

ムネアカハラビロカマキリ *Hierodula venosa* は、近年県内でも多く記録される外来種のカマキリである。筆者は岡崎市北山湿地で本種を観察しているので、分布記録として報告する。

《データ》

岡崎市池金町上北山（北山湿地）2017年10月7日

1♀目撃 写真1・2

当日はため池の自然研究会が主催、西三河野生生物研究会が合同して行った自然観察会で、駐車場を後にして間もない「やなが沢池」近くで本個体は見つかった。今回、観察した個体は、腹部が大きく膨らんだメスであった。

「胸赤」の和名のように、胸部の腹側は赤味を帯びた色彩をしており、在来種のハラビロカマキリ *Hierodula patellifera* よりも長い胸部をしていた。他にも在来との識別点として、間野・ほか(2015)では、前脚基節上部の突起の数が在来種が3個程度であるの対して、ムネアカハラビロカマキリでは8～9個としているが、筆者が観察した本個体では11本であった。この突起の数には、多少の個体差が存在するのかもしれない。

少しためらいはあったものの、本個体は写真を撮影した後にその場に放逐した。間野・ほか(2015)によれば、豊田市では本種の侵入した後に、在来種ハラビロカマキリの生息密度が低下することが知られている。

今後周辺をはじめ岡崎市内でも、ムネアカハラビロカマキリが見つかる可能性がとても高い。競合する関係にある在来種・ハラビロカマキリとともに、その分布・増減に注視していきたい。



写真1 岡崎市北山湿地産ムネアカハラビロカマキリ 2017年10月7日



写真2 上写真の前脚基節付近の拡大

引用および参考文献

- 市川顕彦, 2014. 愛知県・岐阜県・福井県で採集されたハラビロカマキリの種類について. 月刊むし 524: 17-22.
- 間野隆裕・宇野総一, 2014. 豊田市におけるハラビロカマキリとムネアカハラビロカマキリの分布動態と形態について, 矢作川研究 18. p.11-18. 豊田市矢作川研究所.
- 間野隆裕・宇野総一, 2015. 矢作川流域におけるムネアカハラビロカマキリの分布拡大, 矢作川研究 19. p.107-112. 豊田市矢作川研究所.
- 吉鶴靖則, 2014. 愛知県矢作川中流域における外来性ハラビロカマキリ属の一種の分布状況, 豊橋市自然史博物館研報 24: 1-5.

2017年度 第3回採集観察会参加記 茶臼山

原田 究

43年振りの採集会へ

5月21日に第3回の採集会が茶臼山で行われた。父の介護でなかなか採集会に出られなかったので、2ヶ月前からショートステイを予約して父を預けて参加した。

三河昆虫研究会の採集会参加は43年前の小5の8月に段戸裏谷で1泊2日で行われた採集会以来だった。あの時は、父に「日本貝類学会の出席で札幌に行くので参加できない」と言われたが、どうしても参加したくて「採集会のお知らせの葉書には東岡崎駅まで行けば車に乗せて行ってくれ」と書いてあるから一人でも行く」と参加を申し込み、独りで出掛けようとした私を母が心配して無理やり駅まで付いて来たものだった。

当時の段戸裏谷は、今とは比べものにならないくらい原生林が残っていて、大平先生と川を遡ってビーティングしたり、ハッチョウトンボの撮影に休耕田に行ったり、原田猪津夫先生からは、飛んでいるカラスアゲハとクロアゲハの見分け方やクワガタが鈴なりにとまっている木を教わった。

そんなわけで、43年ぶりの採集会に参加するに至り、はやる気持ちが抑えきれず、前日の夕方から入ってライトトラップをしてから参加しようと、山崎さんに電話して待ち合わせ場所の旧国民宿舎跡が何処にあるのか伺ったが茶臼山に行ったことがない私には、懇切ていねいな山崎さんの説明も理解できず、何度か電話をかけ直させてもらった。右も左も分からない私に業を煮やした山崎さんに「茶臼山はまだ寒いのでライトトラップをしてもそんなに虫は来ないから「ぎょぎょランド」前で集合ね」と押し切られた。仕方ない、何を言われてもちんぷんかんぷんだったのだから……

後で分かったことだが、山崎さんの説明を頼りにグーグルマップで場所を探していたが、旧国民宿舎が廃墟になっているとは思わず、ストリートビューで見過ごしてしまったようだった。

ぎょぎょランド集合

当日は早起きして、国道23号を蒲郡方面へ突き当たりまで行き、そこからは国道1号線に移動して豊川市赤塚山公園にある淡水魚水族館「ぎょぎょランド」に程なく到着した。豊田南から高速に乗って豊川で降りて……といった経路を考えていたが、山崎さんから「23号で来た方がお金もかからないし早いよ」と聞いたので、「大丈夫かなあ」と不安に思いながらの出発だった。さすが山崎さん、スムーズに車は流れてあっという間に着いてしまった。数年前にカーナビを便りに高速を使い、豊橋市自然史博物館に父と母を連れて行ったことがあるがこんな時間では着かなかった。

『ぎょぎょランド』で待っていると程なく山崎さんが車で現れ、「小鹿さんと大場さんが参加するけど現地集合」とのこと、山崎さんの車に乗り換え現地に向かった。

「今日は茶臼山でシバザクラ目当ての観光客が押し寄せるから、混む道路を迂回して現地に向かいます」と山崎さんは慣れた感じで車を走らせ車も疎らな山道を進んで行った。私は茶臼山に近づくにつれて車が混んで渋滞に巻き込まれるんだらうと覚悟していたのだが、いつまで経っても車は増えず、あっという間に大場さんとの合流予定の「道の駅つぐ高原グリーンパーク」に着いてしまった。ここでトイレ休憩して、大場さんを待っていたが、車が現れないので山崎さんが携帯に電話すると「足助の手前で渋滞して動かない」とのことだった。周りを散策して暫く時間をつぶし再び山崎さんが電話すると「お子さんが車酔いでこのまま行けそうにないから、今日は諦めて旭高原の方に切り替える。」と言うことで合流を断念した。このまま茶臼山に長野方面から入るルートで車を走らせ小鹿さんとは茶臼山で合流することになった。

採集観察会の醍醐味

途中、根羽村小戸名の携帯の電波塔周辺に車を駐め、「ここがポイントです。」と山崎さんが採集ポイントを教えてくださいました。ここでしばらくビーティングをすることになり、山崎さんに教えて頂いた林道を進んで、コメツキムシやハムシ、ゾウムシ類を落とし、なぜかサナエトンボも落ちた。トンボが落ちてきたことに驚きながらも43年前の記憶で該当しそうなリストを頭の中で巡らせ「ダビドサナエの♀かなあ・・・」と見当をつけたが、家に帰って調べてみると横から見れば類似するが前胸背面の違いでヒメクロサナエの♀だと同定できた。周りは杉の植林で林道の周辺に僅かに広葉樹が残る感じで自分1人では決して目を留めることのない感じの場所だった。自分では見つけることが難しい採集ポイントを教えてもらえるのも採集会のいいところだ。

再び、車を走らせ、今度は根羽村の「ワン、ワン」と鳴くカエルで有名なネバタゴガエルの茶臼山高原両生類研究所側の茶臼山麓まで来ると突如渋滞に巻き込まれたので車を止め、そこから周辺を少し歩いて採集を始めた。車から研究所側に道を上がりながらビーティングをして進み、コメツキムシ・ハムシ・ニワハンミョウ・ヒメカメノコテントウとコカメノコテントウのどちらも採集できた。初めは家の庭にいるヒメカメノコテントウと同じかと思ったけど、何か雰囲気が違うものがある。テントウムシは模様の変異が激しいからからその1つかと思いつつも、テントウムシに詳しい山崎さんに「これはヒメカメノコテントウですかね・・・」と相談すると「ルーペがないからよく見えないので何とも言えないけどコカメノコテントウかも知れない。ヒメカメノコテントウとコカメノコテントウは、表で区別するのは難しいけど裏返せば後脚腿節が黒っぽくなっているのがコカメノコテントウで、ヒメカメノコテントウは後脚腿節が薄い色のままだから容易に同定できるよ」と山崎さんに教えていただいた。類似した虫の同定ポイントを直に教えられるのも採集会の醍醐味だ。

茶臼山湖周辺での採集では、ビーティングでめぼしい物は採れなかったが、風に吹かれて目の前を素早く通り過ぎたミヤマセセリを反射的にネットインした。擦れがあって新鮮な個体ではなかったが、見かけたことはあってもネットインしたことはなかったのでうれしかった。

今度は、茶臼山麓の豊根村側に車を走らせ、夏に来てライトトラップをしたらくワガタやカミキリが面白そうな所の道路沿いに車を止めると、車の後ろに牛の糞があり、そこにハネカクシやクロマルエンマコガネがいた。家の庭には、犬の糞にコブマルエンマコガネが来るが、クロマルエンマコガネは採ったことがなかったので普通種ではあるが感動した。よく見ると前胸背板に逆V字の突起があり、上から見ると三角錐の山の様に盛り上がってみえるのでカッコイイ。

山崎さんの案内でそこから林内に入り、ビーティングをして樹上性のヨツボシヒラタシデムシをはじめ、ゴミムシ類・コメツキムシ類を採集した。ここは、シーズン毎にいろんな虫が狙えるそうだから、また時間を作って立ち寄りたい。

途中、休憩して山の上から山麓を眺めると、シバザクラの観光に来た人たちで賑わい、道路は渋滞していた。「小鹿さんは今どこにいるのかな。渋滞に巻き込まれていなければいいけど・・・」と思いを馳せ、奇跡的な合流を願った。

結局、小鹿さんとは合流できないまま帰路につくことになり、帰りの車の中で、山崎さんには、虫以外にも骨董品に造詣が深く、集めていることを聞き、家で置き場に困っていたこけし等を引き取ってもらう約束までさせていただいた。山崎さんの趣味の幅の広さと造詣の深さに圧倒されている内に「ぎょぎょランド」に着き、車を乗り換えて帰路についた。

採集会は、採集地のポイントや同定の仕方を教えて頂いたり会員との交流ができるので個人での採集とは違った楽しみ方ができる。機会があればまた参加したい。

父の介護に明け暮れる日々でまだこけし等を荷造りできず、お送りしていないがこの原稿が『三河の昆虫』に掲載されるころには何とかお渡ししたい。

蝶類研究資料館で企画展「藤岡コレクションと愛知県のチョウ」を開催

大場 裕一

鶴舞公園にほど近い中部大学名古屋キャンパスにある蝶類研究資料館では、この夏、公開企画として「藤岡コレクションと愛知県のチョウ」を開催しました。主催は中部大学、共催は三河昆虫研究会・杉坂美典氏、監修は名和昆虫博物館、後援は愛知県教育委員会・名古屋市教育委員会・春日井市教育委員会。入場は無料。期間は2017年8月16日から8月31日までの16日間で、のべ393人の来館者がありました。初日には中日新聞の取材があり、8月21日には学校法人中部大学理事長御夫妻も訪れました。

今回展示したのはドイツ箱54箱。その内訳は、藤岡知夫コレクションから16箱、中部大学周辺の昆虫で8箱、三河昆虫研究会の杉坂美典氏のコレクションから30箱です。いずれも、主に愛知県で見られるチョウを中心に選びました（中部大学周辺の昆虫については、トンボなど他の昆虫分類群も含んでいます）。また、日本の主なチョウについて裏と表から高解像度で撮影した画像を、手元のコントローラーで操作しながら拡大したり縮小したりしながら見られる、デジタル標本コーナーも用意しました。鱗粉や毛のひとつひとつまでくっきり見える画像をバーチャルに動かせる装置に、訪れた子供たちは楽しそうに声をあげていました。



蝶類研究資料館は、中部大学が藤岡知夫氏からコレクションすべてを譲り受けて2016年にオープンしました（標本箱は、現在も整理しながら順次中部大学へ移送中）。藤岡コレクションは、ドイツ箱で1700箱、推計22万頭に及ぶ、世界最大級の日本産チョウ類のコレクションです（外国産を一部含む）。学術的に価値の高い第一級の標本を数多く含みますが、ドイツ箱に折り重なるようにびっしりと並び詰められたチョウは箱ごとにデータ管理されているため、現在のところそれを崩して展示用の箱を作ることは行っていません。そのため、藤岡コレクションの展示はオリジナルの



写真1 展示風景

状態のままで行いました。これは、チョウの愛好家にとっては、世界的にも貴重なコレクションをそのまま見ることのできるチャンスと言えますが、大学生や近隣から来られる一般来館者にとっては、同種ばかりが詰め込まれた箱は(コレクションの迫力は感じられるかもしれませんが)、少々退屈かもしれません。ちなみに、今回、藤岡コレクションから展示したのは、ミヤマカラスアゲハ、アオスジアゲハやナガサキアゲハなどで、アゲハだけで展示キャビネットが埋め尽くされた様子は壮観でした。



写真2 展示されたチョウの標本に見入る来館者

チョウの熱心な愛好家はさておき、近所の家族連れにも楽しんでいただくということで、今回はチョウの愛好家として膨大なコレクションで知られる三河昆虫研究会の杉坂美典氏に御協力をいただきました。杉坂氏のコレクションから「愛知県のチョウ：里山のチョウ (7箱)」「愛知県のチョウ：街中のチョウ (7箱)」「よく似たチョウ：チョウの類似種 (7箱)」「変わったチョウ：チョウの異常型 (9箱)」の4テーマですばらしい説明入りの展示を作っていただきました。特に人気があったのは、「チョウの異常型」の中で紹介した雌雄モザイク個体の展示で、これに関してはテレビ局からも問い合わせがありました。左右の翅文様が違うものについては、新聞などで見聞きしたことがある人も多いようですが、今回展示したような、翅の部分部分ごとに雌雄がモザイク状になっているものがあることを知っている人が少なかったようで、来場された皆さんはとて驚いてその珍しい標本に見入っていました。

来場者からいただいたアンケートには、「ギフチョウの各産地が見たい」「高山蝶が見たい」といった愛好家からのリクエストと、「世界の美しく珍しい蝶も見たい」「子供はクワガタやカブトも見たいようです」といった一般からのリクエストが多数ありました。チョウの愛好家向けの展示の割合と一般向けの展示の割合については、アンケート結果を参考に今後の計画を考えてみたいと思います。また、「解説者がいるとよい」「生きたチョウの展示があるとよい」「ペーパークラフトなどのお土産があるとよい」といった意見もいくつかありました。これらについては、今後の課題かと思っています。

蝶類研究資料館の夏の展示はこれからも毎年開催される予定です。小さなスペースではありますが、これからはチョウに限定せず広く面白い昆虫の展示を行い、近隣の子供たちの夏休みの自由研究の材料探しなどにも役立てていただければと考えています。予算の関係で十分な謝礼ができないのが心苦しいところですが、引き続きぜひとも三河昆虫研究会の皆さまからのご協力をいただきたく思う次第です。

最後になりましたが、三河昆虫研究会会長の大平仁夫博士と事務局の小鹿亨氏には、企画の段階から相談に乗っていただき大変お世話になりました。また、杉坂美典氏には、台湾調査でお忙しい中、一般向けに分かりやすい標本箱をご準備いただき、さらに搬入から搬出までお手伝いいただきました。アンケート結果の集計結果並びに内容の確認につきましては、中部大学の稲ヶ部正幸部長と中部大学三浦記念会館の梅村勝利課長にご教示をいただきました。ここに深く感謝いたします。

参考

新聞記事「中部大でチョウ標本展」中日新聞 2017年8月19日朝刊近郊版

奥三河のミドリシジミ

白井 和伸

ミドリシジミの幼虫は、平地ではハンノキを利用し、卵は幹にまとめて産み付けられる。山間部では、ケヤマハンノキを利用し、卵は冬芽の基部に1個ずつ産み付けられる。

筆者は、このように生態が異なる平地のミドリシジミと山地のミドリシジミの接点はあるのかかねて気になっていた。平地のミドリシジミについては、白井(1996,2001)に報告したが、豊橋市の岩崎丘陵一帯や渥美半島には広く分布する。一方、奥三河からは、手元の資料では、たとえば「愛知県の昆虫(下)」(1991)には、引用で8例が拾われているに過ぎず、詳細がつかめない。本種は普通種の印象があり、筆者自身、当初は奥三河のように山間部には広くどこにでもいると思っていたが、実際に探してみるとそれほど満遍なくいるわけではないことがわかった。目新しい産地はないが、記録集積の意味でひとまず報告しておきたい。

なお、調査は、本種の幼虫が巣を作る習性を利用して幼虫を捜した。見つけた幼虫の一部は持ち帰り、飼育・羽化させた。寄生率は場所によりばらつきはあるが、概してそれほど高くなかった。♀は多型を生じることが知られている。羽化数の後の()内に内訳を示した。

2010年6月6日

設楽町 県道33号・瀬戸設楽線 8~10km表示付近, 6幼虫, 6月29日に2♂羽化

2013年5月15日

設楽町 県道33号・瀬戸設楽線 10~11km表示付近, 12幼虫,
6月11~21日に8♂3♀羽化(A型:1, AB型:1, O型:1) 写真2

2013年5月24日

豊根村坂宇場 林道霧坂線, 5幼虫, 6月20~25日に4♂1♀羽化(O型:1)
豊根村古真立 林道豊富線2.5km表示付近, 2幼虫, 6月26日に1♂羽化
豊根村三沢 県道426号・津具大嵐停車場線 山内付近, 3幼虫, 6月18日に1♀羽化(O型:1)
設楽町津具 県道426号・津具大嵐停車場線と林道小楨立線分岐付近, 26幼虫,
6月21~26日に10♂8♀羽化(B型:2, O型:6)

2014年5月24日

豊根村古真立 林道豊富線8km表示付近, 2幼虫, すべて寄生

2015年5月27日

設楽町東納庫 林道碁盤石山線 碁盤石山南方, 5幼虫, 6月18~25日に2♂3♀羽化(O型:3) 写真1
設楽町東納庫 林道境川線 笹暮峠付近, 3幼虫, 6月22~23日に2♀羽化(O型:2)

2016年5月24日

豊田市稲武町 県道80号・東栄稲武線 名古屋市野外教育センター東方, 2幼虫,
6月27日に1♂羽化

2016年5月29日

設楽町津具 町道東山箱淵線 長野県境南方1km付近, 4幼虫, 6月25日に1♂羽化
設楽町津具 林道箱淵線, 1幼虫, すべて寄生

2017年5月23日

豊田市大野瀬町 池之平牧場, 3幼虫, 羽化せず

2017年5月31日

設楽町津具 町道東山箱淵線 長野県境南方1km付近, 5幼虫,
6月27~28日 2♂1♀羽化(O型:1) 写真3

設楽町津具 町道東山箱淵線 長野県境沿いの枝道, 3幼虫,
6月29日~7月2日 1♂1♀羽化(O型:1)

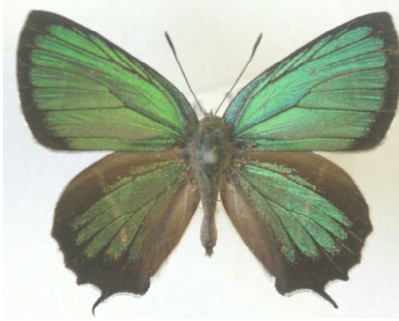


写真1 ♂ : 2015年6月18日羽化
林道基盤石山線産



写真2 AB型♀ : 2013年6月19日羽化
県道瀬戸設楽線産



写真3 O型♀ : 2017年6月27日羽化
町道東山箱淵線産

参考文献

愛知県農地林務部自然保護課, 1996. 愛知県の昆虫(下).

白井和伸, 1996. 渥美半島のみどりシジミについて. 蟲譜(65):31, 三河生物同好会.

〃, 2001. 90年代, 三河地方で採集した蝶の記録. 蟲譜(75):11~14, 三河生物同好会.

2017年度をふり返って・・・

2017年3月, 初めての試みとして, 総会を西三河野生生物研究会と合同で開催しました. 会場も安城市民交流センターに移して行われました. とはいえ, 会計が別である以上は, 会務としての総会は別々に行い, 各総会の終了後に, 基調講演・会員各自の研究報告等が行われました.

会報「三河の昆虫」はNo.64から, 印刷所を変更してデータでの入稿に切り替えました. 校正もメールのやりとりが中心になり, よりスピーディに作業が進むようになりました. それまでB5版からA4版に拡大され, 掲載された記事やページ数も1.5倍になり, 充実したことを報告できました. これも編集委員の皆さんをはじめ, 会員の皆様のご理解・ご協力のおかげと感謝しております. なお, 印刷部数を減らしたこともあって, 販売を委託した業者・六本脚さんでは既に完売だそうです.

副会長の山崎隆弘さんが企画運営の観察採集会も, 茶臼山や佐久島等の合計4回が行われ, その成果の一部を市川靖浩さんや原田究さんが, 今回の会報に報告してくれました.

2016年に事情で一度閉鎖された研究会のサイトも, 杉坂美典さんのご尽力により, 2017年から再開されました. さらにメーリングストの運用も開始され, 今後会員間での情報交換等の利用が期待されます. 2018年度の皆様のご活躍を期待しております. そして, 次回の総会や会報に, 多くの成果・課題を持ち寄っていただくようお願いいたします. (文責: 小鹿 亨)



大平仁夫先生の挨拶 左端は野生研究会の田中正明先生